

## 第1班B

### 『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編 編纂共同研究

#### (1) 共同研究員名

研究班代表：小熊誠

共同研究者：渡辺美季

研究協力者：川野和昭 田名真之 得能壽美 富澤達三 豊見山和行 真栄平房昭 本村育恵

#### (2) 研究目的

「南島雑話」以前の近世奄美の習俗を描いた絵巻「琉球寫真景」、琉球本島関係では「琉球進貢船図屏風」、そして八重山の「八重山蔵元絵師画稿」を対象として、近世琉球地域における風俗絵図を研究し、その絵引を作成する。

#### (3) 活動経過

- ① 2011年度は、本研究会の初年度であり、まず「八重山蔵元絵師画稿」の絵引作成を目標とし、4月27日に打ち合わせをした。第1回研究会を6月6日に開き、元八重山博物館学芸員であった得能氏を中心に絵引作業の分担を決め、絵引研究専門家である富澤氏を中心に絵引作成の書式を検討した。第2回研究会を8月17日に開き、各自の分担部分を持ち寄って検討した。第3回研究会を2012年1月31日に開催し、各自が作成してきた絵引資料について検討を行った。2月21日に第4回研究会を開催し、さらに各自の絵引資料を検討し、不明な点を明確にすることとした。また、渡辺、得能、富澤の3名で、2月24日から27日の日程で石垣調査を行った。
- ② 2012年度は、「那覇港図屏風」を取り上げ、そこに描かれた那覇および首里の歴史や民俗に関する絵引を作成した。研究協力者として、琉球史研究者であり、「那覇港図屏風」などに詳しい神戸女学院大学真栄平房昭教授と琉球大学豊見山和行教授に新たに加わっていただいた。2013年2月27日から「八重山蔵元絵師画稿」の原稿を持ち寄って、確認作業を行った。「琉球進貢船図屏風」の分担を決める研究会は、3月4日から5日に行った。さらに、2013年3月28日から31日まで、得能氏と富澤氏によって沖縄の浦添市美術館で「琉球進貢船図屏風」の調査、名護博物館で「琉球寫真景」の調査を行った。
- ③ 2013年度は、8月17日から19日に研究会を開催した。17日は、「八重山蔵元絵師画稿」の原稿を確認した。18日は、「琉球進貢船図屏風」の切り分けを検討し、19日はそれに基づいて担当を確

認した。「琉球寫真景」の研究会を、鹿児島から川野氏をお招きして2014年2月13日から15日に開催した。11枚の図の担当ごとに川野氏を中心として検討した。2月22日から24日まで、最終的な研究会を開催した。主に、「琉球進貢船図屏風」について担当者が作成した原案に対して、参加者全員で確認していった。その中で、近世の那覇における人々の生活について細かい議論が交わされ、それが絵引の中でも反映されることとなった。

#### (4) 研究成果

3年間の研究を通して、「八重山蔵元絵師画稿」「琉球進貢船図屏風」「琉球寫真景」の研究会をのべ8回行い、その絵引を完成させることができた。成果物としては、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編として刊行することになる。

この研究に携わった研究者は、八重山の歴史・民俗の専門家である得能壽美氏、琉球近世史の専門家である田名真之氏、豊見山和行氏、真栄平房昭氏であり、それぞれの研究情報に加えて、「琉球進貢船図屏風」の解説を行ったことのある方々であり、かなり詳細な絵引を作成することができたのではないかと考えられる。さらに、錦絵研究者であり、今までの絵引作業の経験者である富澤達三氏から、技術面だけでなく、構成や索引作成など様々な点で力強い協力をいただいた。

このような方々を、琉球史の専門家である渡辺美季氏に取りまとめて頂いた。それはみごとな取りまとめで、そのおかげでこの成果が3年目の2013年度に終結することができた。それを補佐したのが、青山学院大学大学院生の本村育恵さんであった。

この奄美・沖縄の絵引研究では、このような最高のスタッフが集まり、その研究成果として密度の高い絵引ができたと考えられる。その成果を基に、この研究を継続してさらに引き上げるために、次年度以降公開報告会を開催する予定である。そこでの成果の公開にも大いに期待がもてる。

#### (5) 今後の課題と展望

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編では、「八重山蔵元絵師画稿」「琉球進貢船図屏風」「琉球寫真景」の三つの絵画資料を対象にした。それぞれの絵には、奄美・沖縄における当時の庶民生活のあり様が、生き生きと描かれている。その一つ一つの名前を調べ、一枚一枚に解説をつけた。その作業の過程で、私たち研究グループで色々なことを情報交換し、話し合ってきた。そこで分かったことは、この絵引はこの研究の端緒にすぎないということだった。

この作業をしていく中で、様々な疑問が湧いてきた。個人的にも、例えば「琉球進貢船図屏風」に描かれた中国へ渡る琉球の船に揚げられる、むかで旗と七つ星旗は、中国の信仰とどのように関連しているのか興味深い。また、「琉球進貢船図屏風」だけでなく、「八重山蔵元絵師画稿」や「琉球寫真景」に描かれている髯しい人それぞれに民俗学的な興味は尽きない。今後は、この絵引をテキストにしてさまざまな研究が可能だと思われる。とくに、歴史学と民俗学の共同研究に大いに期待がもてる。

当面、2014年度に、『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編の完成を記念して、研究報告会を計画している。1回は、この絵引の対象地である沖縄で開催し、地元の方々へ成果報告するだけでなく、この

絵引を利用した地元での研究の発展を期待したい。もう1回は、神奈川大学での研究報告会を計画している。それは、従来の絵引と比較する事によって絵引研究の進展を議論していきたい。

『日本近世生活絵引』奄美・沖縄編は、近世における民衆の生活が視覚を通して理解できるだけでなく、その中で現代の民俗に繋がる部分も数多く見ることができる。奄美・琉球を対象にした歴史学と民俗学の協働によってこの絵引は完成することができたが、今後もこれを素材にした歴史学と民俗学の共同研究の進展に期待したい。